

創立30周年の記念号の発刊に寄せて

学 長 田 畑 茂 二 郎

今年54年（1979年）は、京都府立大学の創立30周年に当る。それを記念して、文学部、生活科学部、農学部、ならびに女子短期大学部に所属する諸氏の研究成果を集めて、本記念号を発刊することになった。

30年前、本学が京都府立農林専門学校と京都府立女子専門学校の2つの学校を母体として、西京大学の名で発足した当時は、大学といっても、なおまだ十分その実をとまなわないうものであった、といわれる。それから30年、大学は、施設の面においても、研究教育体制の面においても、面目を一新したといえることができる。昭和45年には文家政学部が分離して、文学部と家政学部とになり、農学部には大学院（農学研究科）が設置された。また、昭和48年には女子短期大学部に生活経済科が設けられ、さらに、昭和52年には、新しい社会の需要に応える趣旨で、家政学部が生活科学部に名称を改めた。当初から総合大学としての一定の企画の下に設立されたものでない関係から、学部全体の構成の上ではやや総合性に欠ける面があり、また大学院は現在のところ農学部にしか設置されていないといった点があるが、しかし人文・社会科学から自然科学にわたる広い範囲において、多彩な研究が活発に行われており、その中にはすでに学界において高い評価をうけているものも少なくない。本記念号は、本学の研究者全員の手によるものではないが、本学のそれぞれの分野における日頃の研究活動の成果を集めたものとして、今日の段階における本学の研究状況を端的に示すものであって、本学の真価を世に問う、1つの貴重な資料であるといつてよいであろう。

創立30周年というのは、大学の発展の歴史の上からいえば、一つの大きな節目に当るといえることができるであろう。つまり、創成期の困難をようやく乗り越えて大学の基礎を固め、この基礎の上に立って、次の段階をめざし新しく前進しはじめる時期だということである。京都府立大学が、この創立30周年を起点として、さらに大きな目標へ前進する新しい一步を踏み出すことを大いに期待したい。大学にはなおその解決のため努力しなければならない課題がかなり残されている。その中でもとくに重要なことは、農学部の大学院に博士課程をおき、文学部、生活科学部のそれぞれに修士課程の大学院を設置することである。昭和45年の学部分離以来最重要課題とされてきたこの問題を、1日も早く解決することが望ましい。本学は学問、文化の都、京都の土地にあって、人材にも恵まれており、将来さらに大きく発展する可能性を多分にそなえている。この可能性を十分に生かすことができるような体制を作ることがぜひ必要であつて、創立30周年を迎えた今日、改めてそのことを痛感している。